

## 聖語の文底秘沈に

### 對する私見

上木 龍慶

物事悉く本末始終あり、緣由なきの興起あらず、興起ありて未だ影響結果の來らざるあるなし、凡そ宗祖一期の御化導も所弘の要法も、必ず次第なかるべからず。

今一毛端を透して管見を呈せんに、文底秘沈の四字を收むる、開目鈔の一篇も、亦必らず然り。然るに人多く萬端彼此の起盡を深く探らずして、唯一文一句に没頭し、或は一章一篇に終日眼を洒して、以て解決を施さんとして、却て一貫統一せられある生命を失ふものあるを多恨とす。所謂支流を攪亂して、本源の清濁を疑ふものあらんを痛む。故に深く大聖人の一期に一貫せる、主義主張を窺はんと欲せば、先づ必ず息諸緣務して、安國開日本尊の三鈔を精研して、終生の御宣示を探り得らるべしなごせすして廣漠散漫との難をなすなからんことを希ふ。今試み

に右三鈔の生起的關係を略示せば、それ安國論は佐前唯一宗旨建立の宣言書、しかも四經二師を引用し給ふの御聖意は、三澤鈔で知る佐前は行化全からざるが故に姑らく台家に附順して僅に第九段の結勸の文に至りて權實相對して速歸實乘の一善との給ふも先づ始に天台眞言禪等の驗し無しとの給ふ其の元意は知らるべし

開目鈔は又本尊鈔に至りて末法所弘の要法と信境的大曼荼羅とを建設遊ばされんの前提御用意ならん開目鈔には五重相對し給ふと云ども未だ確然なる勝劣を申し出し給はざる所以のものは勸持色讀定んで本化なること推量候らん既に眼前なりと雖も末世失心の一切衆生は無明の酒に酔へるが故に一篇上下二卷を御選述あつて一は先の安國論中の速歸實乘の一善を廣判し一は勸持色讀末法にあらば必らずや本化なるべしと五重相對に寄せて我身末法の導師なる事を治定し給ふ此の邊に約さば人法合論の御書と見るを得べくも深く其の文勢を討究せば教判は一往安國論を廣判し再往は人正なる事を知らん然らざれば何ぞ勸持色讀の佐後に於て謂々として教判未だ全く勝

劣を論じ給はざるや是れ必らず弘法は人先法後なればなり今當開目鈔をして正しく人正法傍の御書なることを篇中の要句を採出してその証とせば、日蓮といひし者は去年九月十二日子丑の時頸刎られぬ魂魄佐渡の國にいたりて云云又大地をさすはづるゝとも春は花咲すとも三類の敵人必らず日本國にあるべしさるにては誰の人々か三類の内ならん又誰人か法花の行者ならん云云又曰く深く此れを知り日本國にこれを知れる者但日蓮一人なりこれを一言も申し出すならば王難必らず來るべし又曰く誰の僧か數々見擯出さ度々流さるゝ日蓮より外に日本國に取り出さんとするに人なし

又天台傳教の迹化を進退批判しては曰く

日蓮は法華經の智解は天台傳教には千分が一分も及ぶことなけれども難を忍び慈悲すぐれたることは畏れをもいだきぬべし又曰く數々の二字の天台傳教いまだ讀み給はず況んや余人をや但日蓮一人これを讀り又曰く天台の一念三千こそ佛になるべき道とみゆれ此一念三千も我等一分の慧解もなし云云明らかにかんぬ天台を脱し給ふことを又他書に曰く此即ち母

が赤子の口に乳を入んと勵む慈悲也又曰く日蓮が慈悲廣大ならば又曰く今度強盛の菩提心を起して退轉せしと願しぬ今度はずでに我が身命に及ぶ又曰く詮するところ天もすて給へ諸にもあへ身命を期とせん乃至 其外の大難風の前の塵なるべし我れ日本の柱とならん我れ日本の眼目とならん我れ日本の大船とならん等と誓し願破るべからず云云と主師親具徳の三大誓願豈本化ならずしては欲するも得んやこれ本化弘通の根元は慈悲の二大文字の發露にあらざるはなしこれ皆常不輕の迹を忍び給ふ皆當忍是事杖木瓦石の諸難然るに彼れは像法此れは末法三類の強敵無量の巨難比すべくもあらず誓一重に末法の通機たる末有の一切衆生の心田に深く佛種子を下さんと勵み給ふ大慈大悲の發願により給ふ然るに篇中去就を闡明し給はざるは三秘の樹立未だしなれば但我が天台智者のみ此の玉を懷けり乃至天台傳教の迹を忍ぶ故なり又曰く此の法顯はるゝこと二度なり傳教と日蓮となり等と或は法花一經に約して或は一念三千に約して未だ事理を分たす通漫に迹を忍び給ふも本門壽量品の文の底にと宣い或は此の書の肝心一期の大事と

宣ふを以て獨斷的に事理の分別内証外用のと勞々しき繁をさけ且つ廣く証文異解を細論するは論法の作法と雖ども今は蛇足的の細科を論せずとも一念三千の觀を凝らし空閑にして三密の油をこぼさずとも時機を知らず等の文に深く依倚して思はば去就明々たり

今正しく文底秘沈の四字を試みに私見を下さば此の一句は文意多含深く刻みし最秘の御聖意あらん然るに古來の碩德唯當一篇を以て權實判と云ひ本迹判なりと云ひ或は文は權實判にして意は本迹判なり等と解して世人之れに惑ふこと久うして吾人昆鈍いまだその落居を見る能はず、然れどもこの聖語をして正解を得ば豈當一篇の進退のみならんや御遺判數百篇の差配それ自在なることを得と信じて疑はし、先師の異說多義する所以のものは深く一念三千の法門は文の底に云云の一語に執して一篇の進退を商議せんとするに基因して未だ人先法後の通格を勸特色讀の今に論せざるが故なるや必然なり、予僭越にも先師の披露は且らく議せずして試みに茲に注せんと欲す姑らく予をして説の自由を與へられんことを希ふ。

夫れ大聖人の御化導全く本師釋尊に順據し給へしことをしらんや、その証左以何曰く佛寂塲花嚴の如尊如啞の會座は宗祖の建長五年四月廿八日建宗に於ける逆徒の蜂起此れなり彼の花嚴會は順機の故に如尊如啞なり今は逆謗の故に蜂起せしのみ佛の爾前四十二年と法花八ケ年は宗祖佐の前後此れなり佛の純陀が家に非滅現滅を示し給へしは宗祖の地上に於ける非生現生の大圓示寂此れなり此等の始中終を以て知らるべし、説法の次第も亦然るものあらんか曰く花嚴の擬宜會は必らず法花の圓休圓用の説會を指し給ふならん、茲に於て議せずんばあるべからざるなり所謂法花開經の無量義經の教判是れなり、大聖人曰く爾前の經々は多經なり此經は一經なり爾前の經々は多言なり此經は一言なり彼々の經々は多年也此經は八年也と 此會に於て人天大衆佛に向つて欲聞具足道を請益すと雖ども爾前に於ける多説を會して僅に從於一法生百千義と所謂從一出多の原理を説して未だ顯本なし茲を宗祖は釋せられて無量義經にて實義と覺しき事一言ありしかども乃至時鳥の音をねをびれたる者の一音きゝたるが如しと注し給ふも佛意

は必らず當會は所謂文の底に壽量品の實義を沈め給へしにはあらざるか故は宗祖は欲聞具足道とは此れ南無妙法蓮華經と釋し給ふ 然りと雖ども實義顯了ならず方便品に至りて略開三顯一の時略して一念三千を説き給ふ斯くして弟子入實甚久滿願等の教益あるも未だ實義の益にあらず未だ佛の顯本あらざれば涌出品に於て彌勒慈の故に疑請して始めて佛の顯本遠壽を開て一會悉く疑者なく師弟俱に俱出靈鷲山の一大儀相を見る此れを顯本の壽量會と云ふ、此の品に開すれば二十八箇の大事合すれば單一の大事あり今予は二箇大事の義を作る一は曰く要旨顯本二には三世益物の隨一たる大勢威猛の未來益の五字要法此れなり（在滅經体の同点は姑らく茲に論せずして後日にゆづる）然りと雖ども此の要法は所謂本門壽量品の文の底に秘し沈めたりとは顯本の奥深く秘めて僅に擣笹和合是好良藥今留在此の譬文あるのみなれば在世一會の中には悉く知れりと雖ども或は不知のものも容有なりしかもはかられず此れ偏に佛意は末法の爲めなれば唯佛與佛の境界にして神力品に於て末法の大導師本化上行に別付囑し給ふ結要の四句

此れ末法の重病を醫する一大仙藥此れなり 大權の天台すら嘿して宣へ給はず此れ所在にあらざる故か今の四句を僅に皆於此經顯示宣說者總結一經唯四而已撮其樞柄而授與之六祖云總攬之以成流通と或は玄收一部と云ふも首題是單名として別に諸法實相を体とす本化は直に經体となして三千餘回の久しき星霜の間懷中に秘して後五回春の時を待ち給しなり 此の神力品に於て末法所弘の要法と能弘の導師とは全く整足せり 聖祖御義口傳に宣はく此の妙法蓮華經は釋尊の妙法にはあらず此の神力品の時上行菩薩に付囑す 此れ等に依て今正しく文底秘沈の實義を獨斷して云はば開目鈔に本門の壽量品の文の底に沈めたりとは此れ一往壽量品と宣ふも再往は必らず我が身末法救世の大導師の格に就いて文の底とは當開目鈔の底にと云ふ御聖意にはあらざるか故は人先法後は弘家の通格 聖祖文永八年九月龍口の巨厄を脱れて全く勸持色讀本化を頭角し給ふ吾人何んぞ茲に於て疑ふの餘地あらんや 故に當鈔を判して人正の御書なりと主張する所以なり而も教判に於ては未だ左右を屹確し給はざるは恰も彼の無量義經の如し法義

は推して知らるべし 一方を云はゞ經曰作大良導師  
大導師又曰船師大船師又曰醫王大醫王又曰調御大調  
御又曰師子勇猛威伏衆獸云云 況んや又能爲衆生盲而  
作眼目聾剝瘖者作耳鼻舌諸根毀缺能令具足云云 何ん  
と一に開目鈔の御題號に適切一致なるに於てをや故  
に予は當開目鈔は彼の無量義經に本尊鈔は此の壽量  
品に應せし御聖意にはあらざる歟 故に上に文底秘  
沈とは當開目鈔と云ふも再往眞實は必らず人法を論  
盡治定し終れる本尊鈔を指す故に今の文底とは永遠  
の文底にはあらず本尊鈔を往拜せられよ寔に寶塔涌  
現の如く巍々堂々乎として宣示顯し給へるを刮目拜  
讀せられよ 今更に本尊鈔の文を引て証せば  
彼曰所詮迹化他方大菩薩等以我内證壽量品不可授與  
又曰召地涌千界大菩薩壽量品肝心以妙法蓮華經五字  
又曰今遣使還告地涌也是好良藥壽量品肝心名体宗用  
教南無妙法蓮華經是也以良藥佛猶不授與迹化何況他  
方乎云云 開目鈔には文定秘沈と意を含ますも本化説  
已心中の當本尊鈔には内証と云ひ肝心と云ふも未だ  
當全篇を検するも文底などは更に似語もなし宜な  
るかな大聖本化大菩薩 もりあらば觀心本尊の事法

にあらずして天台の理法か或は眞言部の密邪の法に  
あらずして何ぞや噫寔に迹化不俱本化獨歩の一大白  
法なり、故に予は無量義經の實義は壽量品を以て解  
し開目鈔の實義は觀心本尊鈔を以て照見してあへて  
究屈なる研法をなすことを欲せざる一人なり、斯の  
如く何等の用意もなく先師未創の獨斷邪説を吐くと  
の誹りあらんも予は姑らく付佛法の外道を以て自ら  
任ずるのみ  
予上來獨斷的私見を呈露せしも 謹んで案するに寔  
に當開目鈔は至難の御妙判なり先師病めり宜なるか  
な 權實判なりと云はんとすれば本迹判あり事の一  
念三千と云はんとすれば乍ち天台智者大師のみ此玉  
を懷けり理三千と云はんとすれば壽量品の文の底に  
と宜い本化迹化を區劃するならんと云はんとすれば  
天台傳教の跡を忍ぶと云いさかと思へば慈悲勝れた  
ることは天台傳教にも譲らずと宜い眞言を破する未  
だしと云はんとすれば乍ち三密の油と云ふ、噫聖意  
を推度するに凡慮を以てして得べけんや、至難眞な  
るかな日蓮と云いし者は去年九月十二日子丑の時類  
はねられ魂魄佐渡の國に來りて 或は曰く去年の十

一月より勘へたる開目鈔と申す文二卷造りて顕きるならば日蓮が不思議とぞめんと書いて勘へたり此の文の心は日蓮によりて日本國の有無はあるべし云云寔に金錚を以て無明の膜を決し遮那佛性の指を見るにあらずんば何れの日か當開目鈔の進退を正解することを得ん、然るに予や僭越にも當一篇の語勢と上引篇中の依文とを根據として今の論旨にあらざれば權實本迹事理等の法門を姑らく辨別せずして直に已解に任せて人正なるの御書と拜讀私見を下せし逆路罪は永く深く碩徳に謝す、

台當二家依經科釋の同異  
に就て像末兩導師の立脚  
地を論ず

郭 風 生

台當兩家に於ける依經科釋の同異に就て像末兩導師の立脚地を辯明せん、初に科釋の同異を論究し次に兩導師の立脚地を辯明すべし。

夫れ妙法蓮華經一部九卷廿九品は其の中の文義本迹を出でず。故に一部の經二經にして不二にして二經を成す。而も二經を分つ所以のものは迹本の二門、各々宗とする所各別なるが爲め也。即ち迹門は因門を明すを正意とし本門は果門を明すを正意とす。然も前述せるが如く本迹は離すべからず、故に科釋自ら一經三段二經六段と分つべし。蓋し一經三段に非れば法華一經を顯し難く。二經六段に非れば法華の宗致竟に窺ひ難し、

然るに天台大師は一經三段を正意とし、二經六段を傍意とす。即ち『記』に二經三段を指して「今記從前」と云ひ、二經六段を指して「若作兩正說」と云ひ「今且」と云ふ、傍正明々たり。蓋し斯の如き所以のものは大師は藥王菩薩の後身として、震旦に興出す慧休囑せらるゝ所は『累品』に於ける總付の一部にして迹面本裏の一經なり。世尊の遺旨に基き像法の時に於て、此の一部を弘宣する之れ大師の本